慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	奥野先生を偲ぶ
Sub Title	Memory of the late professor Shintaro Okuno
Author	村松, 暎(Muramatsu, Ei)
Publisher	慶應義塾大学藝文学会
Publication year	1969
Jtitle	藝文研究 (The geibun-kenkyu : journal of arts and letters). Vol.27, (1969. 3) ,p.423- 425
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	国語国文学・ 中国語中国文学特集
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00072643-00270001-0423

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

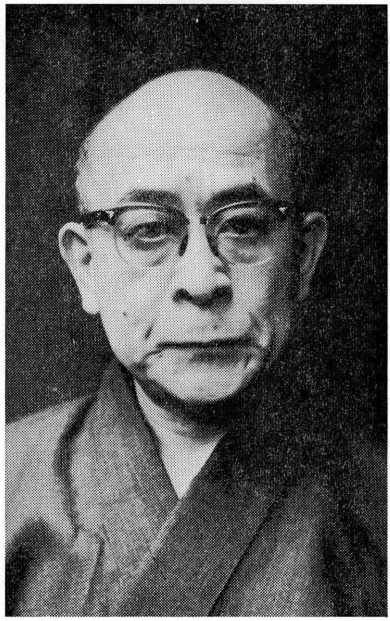
The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

奥野先生を偲ぶ

村松　暎

奥野信太郎先生が亡くなってから、早いもので、もう間もなく一年になろうとしている。この特集号が出るころには、一周忌もすぎていることだろう。

先生の御逝去は、あまりに急なことだったので、私たちには先生がこの世におられなくなったということが、しばらくの間はなにか十分には納得できぬような気持ちだった。よくいわれるように、その辺からひょっこり姿をあらわしそうな気がした。静かに先生のことを追想できるようになったのは、最近のことである。



先生は街なかが好きだった。根っからの都会人だった。浅草の田舎臭さは好きだったが、田舎は嫌いであった。

「田舎っぺ」

というのが、先生の最大の侮蔑の言葉だった。東京生まれ、東京育ちでも、気に入らないと、

「あいつは田舎っぺだ」

といわれた。すべての判断が趣味を基準にしていた。私のような田舎者が、先生と長い間おつきあい願えたのは、考えてみると不思議な気がする。

苦労もあった。なにか学問上のことで、先生の意見を求める時にも、無粋にいきなりその問題を持ち出すわけには行かなかった。なにか雑談をして、その方へ話を持って行くか、潮時を見はからって切り出すかしなければならなかった。

先生は細かい指導というようなことは、なさらなかった。これも雑談の間に、談たまたま学問に及ぶのを、逃さずにとらえなければならなかった。先生の話術に引きこまれて打ち興じ、うかとしていて、ついに忘れてしまうことも多かった。勉強とすれば、無類に楽しい勉強であった。

先生に中国文学の専門書の著作がないのも、同じ理窟から出ている。随筆家として通っていたし、御自分でも、随筆がお好きだった。その随筆の中に、うまく学問をちりばめた場合が、先生の学問として成功した発表法なのであった。

先生の研究発表を、一度だけうかがったことがある。もう、十五年あまりも前、広島で中国学会の大会があった時だった。私は先生と御一緒して広島へ行った。汽車の中で先生は、鞄の中をかきまわして、

「しまった、しまった」

といわれた。原稿を忘れてきたというのであった。

だから、発表は原稿なしだった。それが『西遊記』鍛冶屋ギルド起原説であった。研究発表を聞いている気はしなかった。面白い講演といった方がよかった。御自身もそれが気に入ったらしかった。

「どう、うまいもんだろ」

と自慢された。先生としては珍らしいことであった。

門弟としては、先生が学説をまとめておかれなかったことは淋しくもあり、残念でもあり、また自分中心にいえば不便でもある。だが、それが先生の方法であれば、なんともいたし方ないことだし、それでよいのだと思わずにもいられない。

先生は晩年、文学の中の〝遊び〟というテーマを考えておられた。学校の前の喫茶店で、ふとそのことを口にされた。亡くなってから、書斎の整理にお宅へうかがった時、日記の端にそのことを書いておられるのを発見した。これこそ先生にうってつけ、というのが適当でないならば、先生にやっておいていただかなければならない題目だったと思う。

いまさら取返しのつくことではないが、もう少しお体を大事にしていただきたかった。大事にさえすれば、まだ十分に長生き出来るお体だっただけに、そう思わずにはいられない。

「酒が飲めなくなったら、生きていたってしょうがない」

そういわれたことがあった。先生とすれば、そう思われたのも無理はないと私も思う。それでもやはり、生きていていただきたかった。生きてさえいて下されば、とさえ思う。いまとなっては、どう思っても致し方のないことはわかりきったことだが、それでもやはり、生きていていただきたかった、と思わずにはいられない。